

自己愛傾向と対人関係に関する研究

著者	亀倉 大地
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第19398号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00128907

全文の要約

自己愛 (narcissism) という概念は、多義的に用いられてきた。その理由として、研究者によって自己愛を健康なものとして捉えるか、病的なものとして捉えるかの違いがあることが考えられる。自己愛を健康的なものとして捉える立場では、「自分をよりよいものとして体験しようとする心の働き」(上地・宮下, 2004) といった定義が存在する。一方、病的なものとして捉える立場では「他者からの賞賛に過剰に依存しながら感謝の念のかけらも持たないこと、つまり、自分が賞賛されるのは感謝すべきことではなく、当然のことであるといった態度」(Kernberg, 1998 佐野監訳 2003, p.48) といったものが存在する。

病的な自己愛を有する人物は、自己概念が不安定であると考えられる。一例として、市橋 (2015) は自己愛の病理として「思い描いている自分」と「取り柄のない自分」といった両極端なイメージしかないことを挙げている。不安定な自己概念を安定させるため、自己愛傾向者は他者に賞賛を求める。しかし、他者との関係が一方的なものになってしまうため、他者との関係は破綻を迎えることとなる。ここに、自己愛傾向者の生き辛さが存在すると考えられる。

本論文は、自己愛傾向の病的な側面に着目するものである。本論文では自己愛について、「自己に対する過度な関心をもち、他者に対して過度な賞賛を求める傾向」と定義した。なお、本論文では実証研究における自己愛を自己愛 (パーソナリティ) 傾向と表記した。臨床家が述べる自己愛や、診断との関連を検討した研究については、自己愛パーソナリティ障害 (傾向) と記載した。

本論文は、6つの章から構成される。第1章においては、先行研究のレビューを行い課題の整理を行った。自己愛については、臨床心理学の理論と社会心理学・パーソナリティ心理学の両面から研究がなされている (Cain, Pincus, & Ansell, 2008)。近年、自己愛には「誇大型」「過敏型」といった二種類が存在することが指摘されている (e.g. Cain et al., 2008)。誇大型は、DSM に記載がなされているような自己愛である。一方、過敏型は DSM での記載が限られている自己愛である。過敏型は対人恐怖との類似点が指摘されることもある。Wright & Edershile (2018) は、誇大型と過敏型の中核には特権意識があると言及している。中核にある特権意識が顕示性 (exhibitionism) と過敏性 (vulnerability) として現れるとされる。Krizan &

Herlache (2018) は自己愛のスペクトラムモデルを提唱している。このモデルにおいても、誇大型と過敏型は現れ方の違いであり、中核には自己の重要性 (self-importance) があるとされる。このことから、誇大型と過敏型という二種類の自己愛傾向は、特権意識の現れ方の違いであると考えられる。

続いて、自己愛傾向と関連があるとされる要因 (e.g. 攻撃性) について言及を行った。自己愛傾向者が攻撃性や怒りを表すのは、否定的なフィードバックを受けた場面である (e.g. Bushman & Baumeister, 1998)。自己愛傾向者が否定的なフィードバックを受けた際に怒りを示す理由として、①「自己イメージが『よい』と『悪い』に分かれており、『ほどよい』といった中間が存在しない可能性」②「傷つきやすさ」の二点について言及を行った。

その後、自己愛傾向を測定する尺度について概観を行った。従来は、Raskin & Hall (1979) が作成した Narcissistic Personality Inventory (NPI) が多く用いられてきた。しかし、NPI は誇大的な側面しか測定できていないのではないかという批判もなされている (上地・宮下, 2005)。近年、Pincus et al. (2009) は病理的な自己愛傾向を測定するために Pathological Narcissism Inventory (PNI) を作成している。本研究は病的な自己愛に着目するため、PNI の日本語版 (川崎・小塩, 2015) を使用することとした。

現在、自己愛傾向について特性 (trait)、状態 (state)、状況内 (within-situation) という三つのレベルで捉えられることが指摘されている (Ackerman, Donnellan, & Wright, 2019)。状況内における自己愛について Ackerman et al. (2019) は、「自己愛の状態および特性に関連する、社会・認知プロセスと短期的な対人関係のダイナミクスを含む」 (p.35) と述べている。このことは、状況における自己愛傾向者の反応という視点だと考えられる。Ackerman et al. (2019) は、誇大型は賞賛のための機会を得ることで自己主張的な行動をとり、その結果として賞賛を得ると捉えている。また、過敏型は批判を受けることで劣等性を感じ、恥を感じると捉えている。これまでの研究の多くは、誇大型自己愛傾向および過敏型自己愛傾向は一つの特性として検討がなされてきた。

自己愛傾向者の攻撃性が高まる場面は、否定的な評価を受けた場面である。否定的な評価を受けた場面に着目し、自己愛傾向者の感情および認知について検討を行うことが求められる。一連の検討を行うことにより、自己愛傾向者の適応に寄与すること

が期待される。よって、本論文では特性としての自己愛および状況内における自己愛に着目することとした。

本論文の目的は、自己愛傾向者における対人関係に関する要因を明らかにすることであった。本論文では、Morf & Rhodewalt (2001) が提唱した力動的自己制御モデル (dynamic self-regulatory model) の枠組みを援用して検討を行った。力動的自己制御モデルでは、自己愛傾向者は個人内方略、個人間方略を用いることで自己概念を守っていると考える。個人内方略においては、自己概念と合致する内容が取り入れられ、合致しない内容は歪んで受け止められる。個人間方略においては、自分の望むような自己像を作り上げるように他者に対して働きかけるとされる。その結果、肯定的な自己知識が構成されるものの、長続きしない対人関係や否定的フィードバックを受け、自己知識は不安定な要素が残る。以上の枠組みを通して、自己愛傾向者の対人関係に関連する要因を明らかにすることを目指した。

第2章【研究Ⅰ】から第5章【研究Ⅳ】は実証研究である。先述のように、自己愛傾向者は否定的なフィードバックを受けた際に攻撃性や怒りが高まることが示されている。そのため、第2章【研究Ⅰ】から第4章【研究Ⅲ】では、自信をもって発表した内容に対して否定的なフィードバックを受けるという自我脅威場面に着目して検討を行った。このことは、先に述べた「状況内における自己愛」に該当する。第5章【研究Ⅳ】では、自己愛傾向者の傷つきやすさの背景について示唆を得ることを目的とした。具体的に述べると、自己愛傾向の形成要因に関する検討を行った。第5章においては、自己愛を「特性」として取り扱っている。自己愛傾向の形成に関わる要因として、養育態度および対象関係を取り上げた。第6章では、【研究Ⅰ】から【研究Ⅳ】で得られた知見について総合考察を行った。

第2章【研究Ⅰ】においては、自我脅威場面における二種類の自己愛傾向と恥および屈辱感の関連の検討を行った。自己愛傾向と恥・屈辱感の関連が理論的に指摘されているが、我が国における検討は少ないのが現状である。大学生および大学院生 199 名を対象に、質問紙調査を実施した。自我脅威場面として、指導教員から他のゼミ生の前で発表の内容について否定的なフィードバックを受ける公条件と、指導教員から一対一で発表の内容について否定的なフィードバックを受ける私条件の二条件を設定した。各条件について共分散構造分析を行った結果、指導教員から一対一で否定的なフィードバックを受けた場合、過敏型自己愛傾向は恥および屈辱感を媒介してストレ

ス反応に正の影響を及ぼすことが示された。従来、過敏型自己愛傾向は傷つきやすさとの関連が指摘されているが、傷つきやすさの背景には恥や屈辱感といった「自分を辱められた」という感覚が存在する可能性が示唆された。一方、誇大型自己愛傾向は恥や屈辱感、ストレス反応に対して有意な影響を及ぼしていなかった。

第3章【研究Ⅱ】では、【研究Ⅰ】の背景にあると考えられる「認知」に着目した。また、【研究Ⅰ】における課題としてフィードバック者との関係性が考えられたため、親しい人物（あるいは、あまり親しくない人物）をフィードバック者として設定した。大学生338名を対象とし、質問紙調査を行った。多母集団同時分析の結果、親しい人物から他者の前で否定的なフィードバックを受けた場合、誇大型自己愛傾向は敵意的認知を媒介して怒り感情に正の影響を及ぼすことが示された。一方で、あまり親しくない人物から他者の前で否定的なフィードバックを受けた場合、誇大型自己愛傾向は「認知」を媒介せず直接、外的怒り表出（怒りを外へ表す）へ正の影響を及ぼすことが示された。過敏型自己愛傾向は、否定的なフィードバックを行った他者との関係性にかかわらず怒り感情を媒介して外的怒り表出、内的怒り表出（怒りを感じた際、内面で表す）に正の影響を及ぼすことが示された。

続く第4章【研究Ⅲ】では、半構造化面接を大学生7名に対して行った。協力者の内訳は過敏型自己愛傾向者2名、誇大型自己愛傾向・過敏型自己愛傾向両高者3名、非自己愛傾向者2名であった。自我脅威場面として、「親しい人物から他者の前で指摘」「あまり親しくない人物から他者の前で指摘」「親しい人物から一対一で指摘」「あまり親しくない人物から一対一で指摘」の4つの場面を略画法にて提示した。そのうえで、発言についての記述を求めた。その後、各場面について、「(吹き出しに書いた内容について)どのように発言するか」「(調査協力者が)心の中でどのようなことを考えているか」「(相手である)Aさんは、なぜこのような発言をしたと思うか」の三点について尋ねた。

調査の結果、過敏型自己愛傾向者は親しい人物から他者がいる前で否定的なフィードバックを受けると【敵意】から発言がなされたと捉える可能性が示された。ただし、【率直な意見】として発言がなされたと捉える可能性も示された。親しい人物から一対一で否定的なフィードバックを受けた場合、各群に共通して【配慮】してくれたと捉えるカテゴリーが形成された。

あまり親しくない人物から他者がいる前で否定的なフィードバックを受けた場合、

過敏型自己愛傾向者は【率直な意見】として捉える可能性が示された。しかし、【敵意】から発言がなされたと捉える可能性も示された。一対一であり親しくない人物から否定的なフィードバックを受けた場合、自己愛傾向による A さんの意図の推測の違いは見られなかった。以上の結果から、他者との親密さによって発言の意図の推測が異なる可能性が示唆された。第 4 章においては、過敏型自己愛傾向者 2 名の間に共通するカテゴリーが見出されていない。課題として、調査対象者を増やして再検討を行う必要性が挙げられた。

第 5 章【研究Ⅳ】では、大学生 500 名を対象に Web 上にて質問紙調査を行った。自己愛傾向の形成と関連があると考えられる「対象関係」に着目して検討を行った。また、父親・母親それぞれの養育態度についても尋ねた。両親の養育態度について、クラスター分析により分類を行った。その結果、「ケア群」「中間群」「過保護群」という三群が得られた。クラスター分析で得られた三群を用いて多母集団同時分析を行ったところ、過保護に育てられたと知覚している場合（過保護群）、他者と親しくなることの困難さを示す「親和不全」や、他者に自らの要求を受け入れてもらいたいと考える「一体性の過剰希求」、そして見捨てられ不安が過敏型自己愛傾向に正の影響を及ぼすことが示された。このことから、親の過度な関わりによって、他者の評価に依存するような自己概念が形成される可能性が示唆された。一方で、「自己中心的な他者操作」はすべての群において誇大型自己愛傾向に正の影響を及ぼしていた。また、見捨てられ不安もすべての群において過敏型自己愛傾向へ正の影響を及ぼしていた。このことから、「自己中心的他者操作」は誇大型自己愛傾向の中核に、「見捨てられ不安」は過敏型自己愛傾向の中核に存在する可能性が考えられた。

最後に、第 6 章では【研究Ⅰ】から【研究Ⅳ】において得られた知見の統合を行った。加えて、本論文から得られた知見から臨床心理面接への応用性について論じた。従来、自己愛傾向は攻撃性の高さや尊大さについて述べられることが多かった。しかし、その背景には傷つきの感覚が存在していることが本論文の一連の研究から推測される。【研究Ⅰ】では恥および屈辱感の果たす役割が、【研究Ⅱ】では敵意的認知の存在が示された。また、【研究Ⅲ】では他者の前で親しい人物から否定的な発言を受けた場合、敵意から発言がなされたと捉える可能性が示唆された。そして【研究Ⅳ】では、過敏型自己愛傾向の背景には「見捨てられ不安」が存在することが明らかにされた。【研究Ⅱ】および Zeigler-Hill, Green, Arnau, Sisemore, & Myers (2011)が指摘す

るように他者への不信がある可能性が考えられる。

本研究で得られた知見からは、臨床心理面接において、自己愛傾向者の背景にある、傷つきやすさや見捨てられることへの恐れに配慮する必要があると考えられる。恥や屈辱感といった傷つきの感覚に着目しない場合、自己愛パーソナリティ者にとって治療者は、さらなる苦痛を与える迫害的な存在として認識されることが考えられる。そのことは、【研究Ⅲ】の知見からも推察される。治療者の発言が自分に対する敵意からなされたと判断され、治療が難航する可能性が考えられる。

本研究の課題として、得られた知見が主に過敏型自己愛傾向に関するものであることが挙げられる。そのため、誇大型自己愛傾向のプロセスについては明らかにできていない。自己愛傾向者についてのさらなる理解を進めるために、従来用いられてきた NPI との比較も求められる。